SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

オ・コ(小)とオー(大)が地名の連濁に与える影響について：明治期村名とその後の音変化から連濁・非連濁の傾向と規則性を読み取る

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2014-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 城岡, 啓二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007998

オ・コ（小）とオー（大）が地名の連濁に与える影響について

―明治期村名とその後の音変化から連濁・非連濁の傾向と規則性を読み取る―

城　岡　啓　二

0．連濁で区別されているオガワとオオカワ

「大川」と「小川」は、オガワとオオカワと発音されるのが基本的で、「小～」地名の場合は連濁して、「大～」地名の場合は非連濁である。「小川」と「大川」だけにあてはまる規則性ではなく、「小沢」と「大沢」の場合もオザワやコザワとオオサワと発音するのが現代日本語の標準的な発音と言えるし、「小田」と「大（太）田」の場合も非連濁と連濁が対立するのが一般的である。「小川」と「大川」は、現代では普通名詞としてはそれほど頻繁に使われる語ではなくなっているし、「小沢」、「大沢」、「小田」、「大（太）田」の場合は、普通名詞としての用法はなく、地名や苗字など固有名詞でしか使われず、固有名詞としての「小～」地名や「大～」地名としての規則性が連濁傾向や非連濁傾向に現れていると言える。一方、普通名詞の場合には、「小～」の連濁傾向や「大～」の非連濁傾向が明確な規則性として確認されるわけではない。また、「小～」地名の連濁傾向と「大～」地名の非連濁傾向にしても以前から規則性がはっきりしていたわけではなく、明治時代から全国的に入手可能になった村名などの地名の発音資料などにあたると、言語変化の結果であることが確認できる。本稿は、現代日本語の地名における複合語前項の「小」の連濁促進力と「大」の連濁抑制力[1]、及びその結果としての地名の連濁と非連濁、そこまでに至る明治期以降の言語変化について、発音資料をもとに傾向を確認し、通時的であれ、共時的であれ、規則性を考察したものである。

傾向や規則性の確認や考察にあたっては、地名の構成についても考える必要がある。日本語の標準的な地名は２拍の前項や後項の組み合わせで全体が出来

[1] 城岡（2014）では、複合語の前項に後項の連濁・非連濁を促す力があると想定される場合に、それを「連濁推進力」と「連濁抑止力」と命名したが、本稿では、「連濁促進力」と「連濁抑制力」に改めた。

ているが、3拍前項や3拍後項との組み合わせだと、連濁・非連濁の規則性が影響を受ける。2拍や3拍以外では、1拍前項や1拍後項もあるが、連濁・非連濁についての傾向ははっきりしない。また、2拍の要素であっても、地名複合語の後項として特別に連濁しやすいものもあるし、連濁しないわけではないが、きわめて連濁しにくいものもある。例をあげると、現代日本語の地名において「口」はきわめて連濁しやすい要素であるし、逆に「下」「浜」「坂」「谷」「原」などは連濁しないか、連濁しにくい要素である。本稿での「小〜」と「大〜」地名の考察ではそういう事情も考慮に入れている。

1．普通名詞の「小〜」と「大〜」

普通名詞と地名を比較すると、大ざっぱにまとめれば、普通名詞の方が強い連濁傾向をもつことは、中川（1978）が述べているように、既知のことなので、この章では、「大〜」と「小〜」の実例でそのことを確認するだけにとどめたい。

現代日本語では、普通名詞の「小〜」と「大〜」の連濁・非連濁は明確な違いがなく、「小型・大型」、「小口・大口」、「小振り・大振り」、「小皿・大皿」「小太鼓・大太鼓」、「小部屋・大部屋」など、「小（コ）」でも「大（オー）」でも連濁する例が多い。普通名詞では「大〜」でも連濁する場合が多いのは、現代日本語の特徴ではなく、明治期でも同様だった。幕末から明治初年にかけての日本語でも「大〜」が普通名詞で連濁することが多かったのは、ヘボンの『和英語林集成』（慶応3、1867）の見出し語で確認できる。「大川」はオーカワ、「大君」はオーキミであるが、オーゴエ（「大声」）、オーグライ（「大食」）、オーヅツ（「大砲」）、オーヅナ（「大綱」）、オーヅメ（「大詰」）、オーデ（「大手」）、オーブネ（「大舟」）、オーバン（「大判」、a large gold coin）、オーゾラ（「大空」）、オーザケノミ（「大酒飲」）、連濁する複合語が多数確認できる。

複合語の「小〜」の「小」の発音はコのものとオのものがあるが、固有名詞ではどちらも使われているが、普通名詞では、オは現代ではあまり使われなくなってきている。『分類語彙表』（1964、2004）には発音が出ていないが、フロッピー版（1993）には発音表記がある。これによると、オガワとオブネ以外は「小」をオと読む基本語が現代日本語の語彙にはない。オブネの方はすでに廃れているだろうし、静岡大学の学生に確認してみると、最近の若い人はオガワももう使わない語のようである。言語外の世界には今も存在するオガワのような対象について述べたければ、「小さな（い）川」と分析的に表現するようである。

つまり、現代日本語では、一般の語彙は基本的に「小」をオとは発音しない傾向にあると言える。以前はそうではなく、ヘボンの『和英語林集成』(1867) には現代語以上に一般の語彙の「オ～」があり、小さな車や植物名としてオグルマがあり、小さな櫛はオグシである。また、オダマキ (a spool of yarn) もあったし、少し暗いことを意味したオグライという形容詞もあったようだ。

2.「小～」地名と「大～」地名の明治期以降の言語変化を調べる

明治時代になってから全国[2]の地名は発音が調べられ、地域別に内務省地理局が『郡区町村一覧』(明13、1880)[3]をまとめている。その後、『郡区町村一覧』に琉球や北海道のデータなども加え、『地名索引』(明18、1885)[4]が作られ、こちらは地名の最初の漢字をもとに同名の地名を集めた全国の地名集である。たとえば「大」の村名のところには、「大 (村)[5]」「大藪 (村)」「大森 (村)」「大見 (村)」「大原 (村)」など、すべての「大」ではじまる村名がそれぞれの名称ごとに集められている。当然、同名の地名が各地に存在することになるが、旧国名 (令制国名) と郡名の組み合わせで村の所在地を記録している。全国に一か所しかない村名の「小柳津」の例で説明すると、「ヲヤツ」[6]とフリガナが付けられ、「駿河志太」とだけ書かれている。国名や郡名は、「国」や「郡」を略しているので、村の所在地が駿河国志太郡という意味である。なお、同一国同一郡に2か所の同名の村名があるときはそのことも付記されている。『地名索引』の地名は、郡名、区名[7]、町名、村名別に編集されている。復刻版は数種あるが (国立国会図書館の近代デジタルライブラリーでも画像データが提供されている)、本稿の調

---

[2] 『郡区町村一覧』には北海道と琉球は含まれていない。

[3] 1985年にゆまに書房から復刻されている。『郡区町村一覧』は活字による印刷ではなく (おそらく木版印刷)、やや不鮮明な場合もあり、濁点の有無の判断は容易でない場合がある。

[4] 『地名索引』の復刻版には、他に、1967年に雄松堂から補訂復刻されたものと1985年にゆまに書房から出版されたものがあるが、本稿の著者は未見であり、比較していない。

[5] 『地名索引』では村名に「村」は含められていないので「大村」は「大」という名称にされている。漢字1字に村の付いた村名は、本来「村」は分離しがたく結びついているのだろうが、統一的に記述しようとするとこうなるということであろう。

[6] 郵便番号簿では、静岡県焼津市に小柳津という町名があるが、「オヤイヅ」とされているので、地名の代表的な発音が変わったことになる。苗字としても「小柳津」はあるが、地名の発音の変種や変化に呼応しているのだろう、多くの読み方がある。『日本の苗字』(日本ユニバック編、1978) は、「オヤイズ、オヤエズ、オヤズ、オヤツ、オヤナズ、コヤイズ、コヤズイ、コヤナズ」をあげている。

[7] 市制前の「市」に相当するような「区」が1878年 (明11) の郡区町村編成法で置かれている。東京府に15区置かれただけでなく、各地の人口密集地に名古屋区、金沢区などが置かれている。

査は、1973年の名著出版の復刻版で行っている。名著出版による誤植訂正や印刷不良箇所の補訂がされているようだが、訂正や補訂の該当箇所は分からない。なお、『地名索引』は「索引」と銘打っているが、書籍の該当ページが調べられるような索引ではない。特定の村名からそれがたとえば駿河国の有度郡にあると調べられるといった意味での索引であるようだが、現代なら「地名集」とでも命名した方が適切だろう。『郡区町村一覧』も『地名索引』も発音はカタカナ表記のフリガナが付いているので、当時の地名の発音が分かるようになっている。本稿で明治の村名データを引用する場合は、表記は元のままとしたが、ヲやハは歴史的仮名遣いとしてであり、当時の一般的な発音にヲガハとオガワの区別などがあったことにはならないのは言うまでもない。連濁・非連濁については、内務省地理局でまとめられた上記の2冊の地名資料では、連濁の有無は同一の地名を決める上での大きな違いとみなされていて、清濁の区別がフリガナでなされている。その上で、『地名索引』では、ヲカハとヲガハなどは、同名の地名として一つにまとめられることはなく、別名として別項目とされているので、地名の連濁・非連濁の発音資料としてはかなり信頼の置けるデータである。

地名発音資料として本稿では明治の村名データは『地名索引』を利用し、比較するための大正期の地名データとして主に『市町村大字読方名彙』(大12、1923) を利用し、現代の発音資料として平成の大合併終了後の2007年時点の郵便番号簿の地名データ[8]を利用した。

2.1 「小～」地名の場合

小國村という村名があったが[9]、この例から『地名索引』の地名データを検討してみよう。

【小國 (村)】

① コクニ (3村)：陸奥東津軽、陸奥南津軽、石見那賀

---

[8] 郵便番号簿のデータは、日本郵便株式会社が現在でも無料で提供しているサービスで、CSV形式で提供されているので、パソコンで検索すれば、全国の情報がいっきに得ることができる。掲載されている地名の最小単位は市区町村の後ろの町域名で、「郵便番号は町域 (町名から○丁目を除く部分、及び大字) に設定しており、小字または通称には原則として設定しておりません」となっている。

[9] 「小国」という地名について、『地名用語語源辞典』(1981) では、盆地や地形上まとまりのある土地という解釈が紹介されている。

② ヲクニ（5村）：陸中中閉伊、陸中南九戸、羽前西田川、羽後由利、備後御調

「小國村」は、石見国や備後国にもあったが、近畿や中部や四国や九州には存在せず、どちらかと言えば、北日本中心の村名であったようだが、『地名索引』の発音表記では連濁していなかった。かつての村名は村名としては消失しても現代の市町村の字名として生き残ることがあり、「小国」や「小国町」という地名は必ずしも消失していない。後継地名が存在しているからだ。郵便番号簿では青森県平川市には「小国～」という合併地名があるし、東津軽郡外ヶ浜町には「蟹田小国」、岩手県久慈市には「山県町小国」、山形県西置賜郡に「小国町」、新潟県村上市に「小国町」島根県浜田市に「金城町小国」、広島県府中市「小国町」、広島県世羅郡世羅町に「小国」、熊本県阿蘇郡に「南小国町」があるが、例外なく、オグニと読んでいる。つまり、オクニからオグニに変わり、コクニも、消失していなければ、オグニに変わったということになる。すべてオグニと「オ～」という形式を使うようになったわけであるが、大正時代の『全国市町村便覧』(1924) でヲクニという地名を確認することができるので、連濁は必ずしも明治期に起きたわけではないことが確かである。陸中國下閉伊郡小國村の発音はヲクニとなっており、まだ連濁していなかった。コクニでは石見國那珂郡は『全国市町村便覧』では消失地名になっているが、陸奥国東津軽郡の「小国」は蟹田村の字名として残っていたし、陸奥国南津軽郡では竹館村の字名として残っていた。『全国市町村便覧』では東津軽郡と南津軽郡の「小国」の発音は村名ではなくなっているので確認できないが、『市町村大字読方名彙』ではどちらもヲクニとされているので、大正期には、コクニからオクニへと発音が変わっていたようである。ところが、『新訂青森県地名辞典』(1979) では、どちらもオグニとされて、現在の郵便番号簿と同じ発音になっている。つまり、青森県の二か所の「小国」の場合、コクニがオクニになり、そのオクニがさらにオグニになったことになる。

陸奥国の２か所にあった小國（村）の発音の変化

コクニ	⇒	オクニ	⇒	オグニ
『地名索引』 1885		『市町村大字読方名彙』 1923		『新訂青森県地名辞典』 1979

苗字や他の名称などの固有名詞についても「小〜」地名の連濁に関する性格は受け継がれているものと想定できるが、発音の傾向がたどれる資料が地名以上に不足しているので、本稿ではほとんど触れていないが、「小国」の場合は静岡県周智郡森町の小国神社がある。遠江国一宮だった小国神社はホームページでも「おくに」とフリガナを付けているが、Wikipedia（2014年確認）は、「正式には『おくにじんじゃ』(國が濁らない）とされる。しかし、地元住民など『おぐにじんじゃ』と、國の発音が濁る人が大半であることも事実」と書いている。古い発音が正式名称として伝承しているのに、地元でもオグニと発音されるという混乱が生じているわけだが、「小国」地名が現在すべてオグニと発音されていることを考えると、当然の混乱であると言えるだろう。

次に、小川村の場合を見ておこう。明治期の村名ではヲガハとヲカハが多く、コカハとコガハは１村ずつだった。郵便番号簿地名にオカワは残っておらず、現代の地名からは消えてしまっている。連濁が進んだことを通時的変化から読み取ることができる。

【小川（村)】

① ヲカハ（22村)：下総香取、常陸東茨城、下野那須、磐城菊多、岩代南会津、岩代岩瀬、陸前名取、羽後由利、加賀石川、越後東頸城、越後南魚沼、越後岩船、佐渡雑太、備前児島、紀伊有田、阿波海部、土佐安藝、土佐香美、土佐長岡、筑後山門、豊後南海部、日向児湯

② ヲガハ（31村)：大和吉野、河内丹北、摂津島下、伊勢鈴鹿、伊勢一志、伊勢度会、三河碧海、遠江豊田、武蔵西多摩、武蔵南多摩、武蔵北多摩、武蔵比企、阿波朝夷、上総武射、陸奥真壁、近江甲賀、近江神崎、近江高島、美濃郡上、上野北甘楽、上野利根、磐城宇多、磐城田村、越前丹生、能登羽咋、丹波南桑田、播磨飾東、紀伊西牟婁、伊予風早、豊後直入、肥前北高来

③ コカハ（１村)：伊勢奄藝

④ コガハ（１村)：周防玖珂

明治期でもコを使った村名は少なく、オカワか、オガワだったと考えられるが、コで非連濁だった唯一の事例の伊勢国奄藝郡のコカハ村は、その後、幾つかの村と合併し、栗真村が出来ているが、栗真村は津市に編入されている。郵便番号簿に「栗真小川町（クリマコガワチョウ)」が見つかるので、コカワがコガワへと連濁して、現存していることになる。

【小澤（村）】

① コサハ（３村）：陸奥中津軽、越後古志、後志岩内

② コザハ（２村）：尾張中島、近江坂田

③ ヲサハ（８村）：遠江城東、上総夷隅、上総上埴生、常陸筑波、常陸久慈、上野北甘楽、岩代大沼、播磨加東

④ ヲザハ（１村）：岩代安達

表記は原典のままとしているので、コサハやヲサハは、当時の発音はコサワやオサワだったものと思われるが、明治期にもっとも広く使われた発音だったオサワや同様に非連濁のコサワの村名は、現在の郵便番号簿地名から完全に消失している。現在は、オザワか、コザワである。これだけ明瞭な変化が起きたのは、地名複合語の前項要素の「小」の連濁促進力が強くなっただけでなく、「澤(沢)」が地名複合語の後項要素として強い連濁傾向を持つように変化したためと考えられるだろう。『地名索引』には「田澤村」が全国に16村あるが、タサハとタザハが半々の８村ずつだった。静岡県なら、遠江国引佐郡と伊豆国田方郡の田澤村はタサハ村だった。郵便番号簿の後継地名が浜松市北区引佐町田沢と伊豆市田沢だと考えられるが、どちらもタザワと発音している。「田沢」地名の場合も、非連濁から連濁への変化は全国で起きていて、タサワと発音する地名は完全に消失している。

【小原（村）】

① コハラ（９村）：大和吉野、伊勢一志、近江犬上、若狭遠敷、越中砺波、越中婦負、越中上新川、因幡智頭、紀伊日高

② コバラ[10]（４村）：石見美濃、安藝豊田、安房平、伯耆日野

③ ヲハラ（13村）：大和山邊、近江伊香、磐城刈田、加賀能美、加賀河北、加賀石川、丹波多紀、播磨飾東、備前赤坂、備後御調、紀伊有田、伊予東宇和、豊後東國東

④ ヲバラ（７村）：大和高市、常陸西茨城、但馬美含、美作西北條、美作久米南條、安藝豊田、紀伊海部

かつては９村もあり、多数あったコハラも現在の地名にほとんど残っていない。郵便番号簿地名では、コハラは新潟県十日町市と滋賀県犬上郡多賀町にあ

[10]『地名索引』では、コバラと読む「小原」がおそらく編集ミスのため２項目に分かれていたので、合算した。

るだけで、郷勢地名の一部として岩手県八幡平市に小原道ノ上（コハラミチノウエ）と小原道ノ下（コハラミチノシタ）、愛知県稲沢市に子生和小原町（コウワコハラチョウ）、三重県いなべ市に北勢町小原一色（ホクセイチョウコハライッシキ）があるだけである。

一方、オハラの場合は、富山県南砺市、福井県三方上中郡若狭町、滋賀県伊香郡余呉町、奈良県吉野郡十津川村、和歌山県有田郡有田川町にあり、オハラチョーなら愛知県一宮市、オハラマチなら石川県金沢市にあり、合成地名の一部としてなら、菱池小原町（石川県金沢市）、北谷町小原（福井県勝山市）、嬉野小原町（三重県松阪市）、飾東町小原（兵庫県姫路市）、室生区小原（奈良県宇陀市）、国東町小原（大分県国東市）がある。つまり、地名としてオハラは衰退しなかったが、コハラはかなり衰退したということになる。なお、村名よりも大きな地名なら、明治期の町名として相模津久井にヲハラ町があった。

衰退したコハラについてはオハラに発音が変わった地名もあるだろう。かつてコハラ村は越中砺波、越中婦負、越中上新川にあったが、現在の富山県の地名では、南砺市にオハラがあり、越中国砺波郡の小原村に由来する地名だと思われるが、コハラからオハラに変わっている。

「小原」の場合は、現在まで連濁語形はやや増えてはいるが、とくに優勢になったというほど増えていない。上で見たように、郵便番号簿ではオハラが5か所、オハラチョーが1か所、オハラマチが1か所である。同じようにオバラを探すと、7か所（宮城県白石市、茨城県笠間市、岐阜県可児郡御嵩町、兵庫県篠山市、岡山県津山市、岡山県久米郡美咲町、福岡県築上郡築上町）、オバラチョーが3か所（茨城県水戸市、愛知県豊田市、鹿児島県鹿児島市）である。他にも合成地名の一部で使われているオバラもあるが、オハラを圧倒するほどオバラが増えているというわけではないだろう。これは、「浜」と同じように「原」が地名複合語の後項としてやや連濁しにくい傾向をもつ要素だからという説明が可能であろう。郵便番号簿地名でイシバラと読む「石原」が1か所（宮城県黒川郡大郷町）しかなく、フジバラと読む「藤原」が存在せず、スガバラと読む「菅原」やシノバラと読む「篠原」やハギバラと読む「萩原」が存在しないのはそのような傾向を受けているのだろう。ただし、クリバラは地名としてある程度存在し（栃木県日光市栗原、新潟県妙高市栗原、兵庫県 赤穂郡上郡町栗原、山梨県山梨市上栗原・下栗原）、マツバラは多数存在するので、この2つの場合が連濁し易くなっているのは、普通名詞由来とか何か別の理由があるのではないだろうか。

【小島（村）】

① コシマ（19村）：大和宇智、大和山邊、和泉日根、摂津西成、伊勢桑名、伊勢朝明、三河渥美、近江野洲、大和宇信濃上水内、信濃上高井、信濃小縣、加賀能美、越中射水、越中婦負、越中上新川、越後刈羽、越後西蒲原、越後北蒲原、土佐安藝

② コジマ（12村）：三河幡豆、遠江豊田、遠江山名、駿河安倍、武蔵幡羅、武蔵大里、武蔵児玉、美濃池田、岩代伊達、能登鹿島、大隅馭謨、大隅大島

③ コノシマ（１村）：但馬城崎

④ ヲシマ（９村）：下総豊田、磐城磐前、陸中東磐井、紀伊有田、阿波美馬、肥後玉名、肥後山鹿、肥後飽田、薩摩甑島

⑤ ヲジマ（３村）：駿河庵原、常陸久慈、越中砺波

明治の村名ではコシマ村は19村あり、もっとも多かったことが、上の『地名索引』の村名データで分かるが、現代の郵便番号簿地名では、コシマは、ほとんど現存しない。大阪府泉南郡岬町に「多奈川小島（タナガワコシマ）」があり、高知県安芸郡北川村と鹿児島県熊毛郡屋久島町に「小島（コシマ）」があり、長崎県長崎市に「上小島（カミコシマ）」と「中小島（ナカコシマ）」と「西小島（ニシコシマ）」と「東小島町（ヒガシコシママチ）」があるが、それだけで、他にはない。地名における連濁語形への変化が進んだことは間違いない。

さて、地名の「小島」ではなく、島名の「小島」はどうだろうか。地名だけでなく、島名も、以前はコシマが多かったと推定される[11]。海上保安庁の『日本沿岸地名表』(1948)は1982年に改訂増補版が出ているが、「小島」の読みがコシマで統一されて

表１　島名「小島」の連濁・非連濁

小島	標準地名集 1981	自然地名集 1991
コシマ	46%（６島）	４%（２島）
コジマ	46%（６島）	92%（44島）
オシマ	８%（１島）	４%（２島）
オジマ	０%（０島）	２%（１島）

[11] 発音資料がほとんどないため島名の「小島」の以前の発音を全国規模で確認することはできない。明治初年の小学校地理教材の字引が地名発音の数少ない資料であるが、師範学校編の『日本地誌略』の参考書の『改正日本地誌略字引大全』(1876) は、現在は無人島になっている八丈小島を「小島」として掲載しているが、コジマというフリガナを付けている。とはいえ、他の各地の島名の「小島」については分からない。筆者は本文で記述している言語変化から明治初年ならまだコシマが多かったはずだと推定しているが、実証は難しいようだ。なお、『字引大全』の記録する連濁・非連濁で現在ことなるものも多く、伊豆七島の新島はニヒシマとしているし、神津島はカウズジマ、御蔵島は「三倉島（ミクラシマ）」としている。式根島もシキネジマでなく、シキネシマとされていて、現在の一般的な発音とは連濁・非連濁がことなる。

いる件について、鏡味（1985：36）は意図的な標準化として捉えていて、「多くの地名が通称はコジマのはずであるがこの表ではすべてコシマで統一している」と書いているが、コシマからコジマへの連濁の言語変化が地名でも起きたことを考えれば、『日本沿岸地名表』は旧来の伝統的な発音を記していて、改訂増補版では旧来の発音を踏襲したと考えるべきだろう。海上保安庁と国土地理院の共同作業で生まれた『標準地名集（自然地名）』(1981）と『自然地名集』(1991）の「小島」の発音を表１にまとめたが、その後の島名「小島」の発音がコジマ優勢になっていくことを跡付けている。二つの地名集の10年間でコシマが46％から４％に激減し、コジマが46％から92％へと激増しているが、地名集の発音と現地の発音の変化には時間差があるだろうから、言語変化が10年間のあいだに進んだとまでは言えないだろう。しかし、コシマが減って、コジマが増えているのは『日本沿岸地名表』から続いている言語変化であり、実際に、その通りに言語変化は進んだと見るべきであろう。現在、海上保安庁はホームページで瀬戸内海の島名データベース「しまっぷ統合版」(合計909島）を公開しているが、合計23島の小島という名称の島名があるが、そのうちコジマが18島でコシマが２島、オシマが３島になっていて、やはり、コシマが劣勢で、コジマが優勢になっている。

【小曾根（村)】
① コソネ（２村)：摂津武庫、越後古志
② ヲソネ（３村)：摂津豊島、武蔵北埼玉、下野簗田

かつては非連濁のコソネとオソネしかなかったわけだが、現在の地名では、逆に非連濁語形がほとんど消失してしまっている。郵便番号簿では非連濁のコソネが兵庫県西宮市小曽根町に残っているだけである。連濁語形では、オゾネが３か所（栃木県足利市小曽根町、埼玉県熊谷市小曽根、大阪府豊中市小曽根)、コゾネが２か所（新潟県長岡市小曽根町、長崎県長崎市小曽根町）である。

他にも、それほど頻繁に使われていた地名ではないが、連濁が進んだ結果、現在では非連濁語形が消失してしまったものを指摘することができる。オクシとは言わなくなった「小串」やコクロとは言わなくなった「小黒」やコフチという発音がなくなった「小淵」である。

【小串（村)】
① コグシ（２村)：長門厚狭、長門豊浦

② ヲクシ（2村）：上野多胡、備後児島
③ ヲグシ（1村）：備後奴可

郵便番号簿に現存するのはオグシかコグシで、非連濁語形はなく、非連濁のオクシは消滅している。現在、岡山市の大字にコグシがあるが、備後国にはオクシ村とオグシ村しかなかったので、どちらにしても、オからコに発音を変え、伝承しているようである。

【小黒（村）】
① コクロ（2村）：越中上新川、越後東頸城
② ヲグロ（1村）：越前坂井

現存地名は多くはないが、コグロかオグロかどちらかで、すべて連濁している。富山市に現在オグロがあるが、上新川郡のコクロ村が音を変えたものと考えられる。

【小淵（村）】
① コフチ（3村）：相模津久井、羽後北秋田、美作東北條
② ヲブチ（1村）：丹波北桑田

「小淵」地名で現存するのは宮城県と愛知県だけだが、コブチ（宮城県栗原市築館小淵西・築館小淵東）とオブチ（愛知県丹羽郡扶桑町小淵）で、連濁語形になっている。他には伝承地名はなく、明治期の村名は現在に地名を残していない。

さらに、非連濁地名が消失はしていないが、それに近い状態の「小～地名」に「小畑」がある。

【小畑（村）[12]】
① コハタ（2村）：陸奥南津軽、播磨印南
② コバタ（4村）：越前吉田、周防都濃、紀伊海部、豊後西國東
③ ヲハタ（4村）：三河東加茂、三河八名、播磨揖西、美作勝北
④ ヲバタ（3村）：因幡八上、因幡気多、播磨神東

郵便番号簿には大阪府八尾市の「小畑町（コハタチョウ）」が唯一の非連濁語形

[12] ここにまとめた以外の読み方にセウハタ（紀伊那賀）、コハタケ（越中婦負）、ヲバタケ（越前今立、丹波船井）があった。後項が3拍のものは、コバタケやオバタケが現在も残っている。

で、オハタは消失し、他は、コバタかオバタである。

オ＋非連濁語形が勢力を弱めていても消失はしていない場合が「小島」の場合だった。シマを後項とする複合地名で非連濁なものが残っているのは、シマはハマほどではないが、非連濁傾向がある程度強いのではないだろうか。一方、サカやタニは「小～」の複合語を作るときも連濁傾向は強くなく、明治期以降連濁傾向が強くなってきたということもない。例外的である。現代でもコサカやコタニがもっとも標準的な語形である。ハマと同様にサカやタニが連濁しにくい後項と解釈することも可能かもしれない。

これまでは後項が２拍の場合について見てきたが、後項が３拍であれば、明治期の村名では必ずしも強い連濁傾向を示さないが、現代の郵便番号簿地名では強い連濁傾向をもつように変化してきた[13]。コハヤシ村の例からこの件の確認をしておきたい。

【小林（村）】

① コハヤシ（13村）：大和忍海、摂津武庫、伊勢度会、三河北設楽、岩代南会津、羽後飽海、越中砺波（２か所）、越中上新川（２か所）、石見邑智、播磨印南、伊予宇摩

② コバヤシ（14村）：大和添上、遠江長上、武蔵荏原、上総長柄、下総印旛、常陸東茨城、上野緑野、上野南勢多、下野河内、下野芳賀、越中射水、伯耆日野、備中小山、安藝豊田

③ ヲハヤシ（１村）：丹波南桑田

④ ヲバヤシ（１村）：常陸真壁

明治の村名では、コハヤシとコバヤシは拮抗していた。ところが、郵便番号簿地名ではオハヤシは三重県伊勢市に小林（ミソノチョウオハヤシ）があるだけで、現代日本の地名にコハヤシは存在しない。これは複合地名の後項の「林」が強い連濁傾向を持つようになったことから説明できる言語変化である。あとで見るように明治期にあっては越中は非連濁の「小～」地名が集中分布していた。コハヤシ村も４村あったが、郵便番号簿地名で確認すると、現在、「小林」はすべてコバヤシと発音している（南砺市、射水市、滑川市、中新川郡立山町に「小林」、砺波市に「本小林」）。中川（1978：294－293）は連濁傾向の強さを

[13] 本稿とは直接関係しないが、前項が３拍の複合地名の場合も現代では強い連濁傾向をもつので、２拍がふつうの固有名詞の語構成要素が３拍やそれ以上になれば、前項であっても、後項であっても、連濁可能であれば、連濁するという規則性が出来つつあるものと考えられる。

「林」に固有の特徴として考えているようで、「藤林（フジバヤシ）は例外的にもフジハヤシとはなりにくい。力関係をいへば、林の連濁性の強さは、藤の連清[14]構成力を圧倒してゐる」と書いている。この林の連濁性の強さは元から今のように強かったわけではなく、現代にかけて強まっている。明治期の村名では、現在のように連濁一辺倒ではない。藤林村は『地名索引』に1例しかなく、上総国望陀郡の藤林村はフヂバヤシだった。竹林村はタケバヤシが4村（上総上埴生、下野河内、越前大野、越中上新川）だが、松林村はマツハヤシが2村（越中砺波、越中上新川）だった。中林村は連濁、非連濁の両方があり、ナカハヤシが2村（伊勢一志、阿波那賀）、ナカバヤシが3村（加賀石川、越後西頸城、肥後玉名）である。現在の郵便番号簿地名では、非連濁のマツハヤシやナカハヤシは消失している。

しかし、現代の地名の連濁傾向の強さは「林」だけの特徴ではなく、共時的な捉え方をすれば、3拍の要素に共通している特徴である。しかし、3拍の要素が以前から強い連濁傾向を持っていたわけではなく、明治の村名データから考えると、比較的新しく成立した規則性である。小平村、小泊村、小堤村のデータをあげておこう。

【小平（村）[15]】
① コタヒラ（4村）：上野南甘楽、磐城石川、磐城亘理、陸奥上北
② コダヒラ（2村）：武蔵那珂、下総中葛飾
③ ヲタヒラ（1村）：上野山田

郵便番号簿にコタイラもオタイラもなく、現代ではコダイラかオダイラである。

【小泊（村）】
① コトマリ（4村）：陸奥北津軽、能登珠洲、佐渡羽茂、後志美國
② コドマリ（1村）：周防大島

郵便番号簿には連濁語形しかない。明治期の村名にはオトマリもオドマリもなかったが、長崎県五島市小泊町（オドマリチョウ）がある。

【小堤（村）】
① コツヽミ（1村）：下総西葛飾

---

[14] 複合語後項が清音のままの場合を中川は「連清」と名付けている。
[15]「平」はヒラとも読めるが、現代なら、コヒラ、コビラ、オビラの読み方の地名もある。

② ヲツヽミ（4村）：武蔵高麗、常陸鹿島、近江野洲、磐城亘理
③ ヲンヅツミ（1村）：上総武射

郵便番号簿地名では、非連濁語形はオツツミだけで、宮城県栗原市金成小堤（カンナリオツツミ）にしかない。現代の地名では、他は、連濁語形で、コヅツミが3か所で（茨城県古河市、埼玉県川越市、滋賀県野洲市）、コヅツミチョウが愛知県安城市にある。オヅツミは茨城県東茨城郡茨城町である。なお、上総国武射郡のヲンヅツミはオンヅミの語形で千葉県山武郡横芝光町に残っている。

「小～」の明治の村名データから判断して、地名でその後連濁が進んだことはこれまでの資料で明確であると思うが、当時の連濁・非連濁に関する地域差についても何か言えるであろうか。連濁が早かった地域や当時あまり連濁しなかった地域を幾つかの地名の発音をもとに出しておこう。比較的多く全国に分布している「小川」「小島」「小林」「小倉」「小原」の結果を整理して、非連濁村名の多い地域（表2）、連濁村名の多い地域（表3）とに分けている。

【非連濁村名の分布（オカワ、コシマ、コハヤシ、コクラ、オクラ、コハラ、オハラ）】

表2　非連濁村名の多い地域（旧国名）

11村	越中
6村	越後
5村	加賀、伊勢、大和
4村	土佐
3村	備前、磐城、信濃、近江、紀伊、岩代、下総
2村	羽前、羽後、佐渡、下野、三河、美濃、丹波、摂津、播磨、伊予、豊後
1村	陸中、陸前、上野、常陸、越前、若狭、山城、和泉、河内、備後、阿波、因幡、石見、筑前、筑後、肥前、日向、薩摩

【連濁村名の分布（オガワ、コジマ、コバヤシ、コグラ、オグラ、コバラ、オバラ）】

表３　連濁村名の多い地域（旧国名）

9村	武蔵
5村	近江
4村	上野、常陸、遠江、大和
3村	下野、美濃、伊勢、安藝
2村	磐城、上総、能登、三河、紀伊、丹波、美作、伊予、伯耆、大隅
1村	陸奥、羽後、岩代、下総、安房、相模、駿河、越中、越前、若狭、備中、摂津、河内、播磨、但馬、阿波、石見、因幡、豊後、肥前、肥後

「小～」の連濁地名で多いのは武蔵であり、武蔵近辺の上野、常陸、遠江も多い。その後の言語変化を考えると、首都や首都周辺の武蔵の発音が全国に普及した可能性があるだろう。一方、「小～」で連濁しなかった地域も地域差は明瞭で、越中、越後、加賀と陸続きになっている地域（同一の広域ブロックとみなすことができる）がもっとも非連濁の語形を使っていたことが分かる。大和や近江のように両方に出てくる地域もあるが、一方にしか現れない地域もかなり見られる。越後、加賀、土佐、備前、信濃は非連濁地域にしか出てこないし、武蔵、遠江、安藝は連濁地域にしか出てこない。

後項が１拍の「小～」地名のデータをまだ出していないが、「小～」地名の場合も、明治の村名のデータでは非連濁がそれなりに多く、その後連濁傾向が強まったことは確かである。「大田」の場合は、後で見るように、非連濁傾向が明治期以降続いているので、他の「小～」地名や「大～」地名の場合と同様の経過をたどって現在に至っているということになる。

【小田（村）】

① コダ（３村）：伯耆久米、筑前下座、豊後南海部

② オタ（12村）：伊賀阿拝、伊勢鈴鹿、近江野洲、磐城伊具、丹後与謝、丹後竹野、播磨神東、淡路津名、筑前志摩、筑後山門、豊後玖珠、大隅囎唹

③ オダ（15村）：和泉泉、武蔵橘樹、常陸筑波、美濃土岐、岩代信夫、出雲神門、出雲飯石、石見邑智、備中小田、安藝高宮、安藝豊田、紀伊伊都、讃岐寒川、豊後大野、日向東臼杵

郵便番号簿で「小田」をオタと発音している地名は、現在、三重県伊賀市小

田町、福岡県朝倉市小田、大分県玖珠郡玖珠町小田の３か所に限られている。

【小津（村）】
① ヲツ（２村）：伊勢一志、武蔵南埼玉
② ヲヅ（２村）：尾張海東、美濃大野

東京都八王子市には「小津町（オツマチ）」があり、現在でも非連濁だが、郵便番号簿地名では非連濁はここだけで、オヅチョウが４か所（愛知県愛西市、三重県松阪市、高知県高知市、島根県出雲市）、他に「小津（オヅ）」が岐阜県揖斐郡揖斐川町にある。オツ村と非連濁だった伊勢国一志郡の小津村は、その後、合併を経て天白村の一部になり、さらに合併し、三雲村になり、町制施行で三雲町になり、2005年に松阪市に吸収合併されている。かつての小津村は松阪市小津町に地名が伝承していると考えられるが、発音はオツからオヅへ変わっている。『市町村大字読方名彙』(1923) ではヲウツと読みが付けられているので、一時、母音が長音化され、その後に連濁したということになるようだ。「小津」の場合、連濁への言語変化を実証できるのは一例だけであるが、「小津」地名をめぐる状況は非連濁から連濁への流れに沿ったものである。

【小木（村）】
① コキ（２村）：尾張西春日井、肥後菊池
② コウギ（１村）：伊勢度会
③ ヲキ（１村）：越後三島
④ ヲギ（２村）：能登珠洲、佐渡羽茂

「小木」も例が少なく、ここから一般的な傾向を読み取ることはできないが、非連濁から連濁への「小～」地名のたどった言語変化と矛盾がないことは確認できる。明治期の村名では肥後国菊池郡の小木村はコキ村だったが、大正期には龍門村の大字としてコキのままだったことが『市町村大字読方名彙』(1923) で確認できるが、現在の郵便番号簿地名では、熊本県菊池市にある「小木」はオギと発音している。連濁とコからオへの変化の両方が起きたことになる。

２．２ 「大～」地名の場合

明治の村名のデータでは、「大～」の非連濁傾向は明瞭に認められ、「小～」の連濁傾向が明治期以降強まったのとは対照的で、明治期以降、あまり傾向は変化していないようである。たとえば、大川村を「オホガハ」と発音していた村

は伊予国上浮穴郡に１村しかなく、琉球大濱間切の１村を入れて全国の17村（和泉南、伊豆賀茂、安房朝夷、美濃恵那、岩代北会津、陸中北閉伊、陸奥中津軽、羽後南秋田、能登鳳至、佐渡雑太、佐渡加茂、丹後加佐、紀伊東牟婁、紀伊西牟婁、肥後葦北、薩摩出水、琉球大濱間切）は「オホカハ」と『地名索引』に記述されている。「大島」と「大澤」の村名データでも同様で、明治期でも非連濁語形が圧倒的だったことは共通している。

【大島（村）】

① オホシマ（38村）：大和宇智、伊勢桑名、三河幡豆、駿河志太、相模大住、相模高座、武蔵橘樹、武蔵南葛飾、武蔵北葛飾、下総香取、常陸真壁、美濃安八、美濃郡上、信濃上高井、上野甘楽、上野新田、下野那須、陸前本吉、若狭大飯、越前足羽、加賀能美、能登羽咋、越後東頸城、越後西頸城、越後岩船、丹波何鹿、丹後與謝、出雲神門、播磨加東、播磨美嚢、備中窪屋、周防都濃、土佐幡多、筑前宗像、筑後上妻、肥前北松浦、日向宮崎、薩摩伊佐

② オホジマ（１村）：越後古志

【大澤（村）】

① オホサハ（45村）：大和宇智、大和宇陀、和泉泉、摂津島上、尾張愛知、遠江榛原、駿河安倍、伊豆那賀、伊豆賀茂、伊豆君澤、武蔵北多摩、上総夷隅、上総山邊、常陸久慈、近江甲賀、近江愛知、信濃南佐久、上野多胡、上野西群馬、下野芳賀、下野那須、岩代南会津、陸前遠田、陸中東閉伊、陸中南巌手、陸奥南津軽、羽前南置賜、羽前最上、羽後雄勝、羽後平鹿、羽後由利、羽後河邊、羽後山本、能登珠洲、越中上新川、越中下新川、越後刈羽、越後南魚沼、越後北魚沼、越後中蒲原、越後南蒲原、越後岩船、丹波多紀、播磨印南、渡島松前

② オホザハ（２村[16]）：能登鳳至、安藝加茂

「大谷」の場合は、「谷」をヤと読む地名が発達した東北から静岡県までの地域もある。オーヤでは連濁・非連濁とは無関係になるが、オータニと発音するか、オーダニと発音するかは、連濁、非連濁の区別である。オーダニと連濁し

[16]『地名索引』ではオホザハが二項目に分かれていたので、合算した。能登国鳳至郡の大澤村は『郡区町村一覧』（ゆまに書房復刻版、1985）でも連濁が確認できるが、安藝国加茂郡の大澤村は印刷が不鮮明なので連濁が確認できない。

た村名は2村しかなく、連濁しないのが明治期と現代の両方に通用する強い傾向である。

【大谷（村）】

① オホタニ（52村）：大和葛下、大和吉野、大和高市、伊賀阿拝、尾張知多、近江蒲生、美濃郡上、岩代大沼、岩代耶麻、岩代安積、陸奥東津軽、若狭遠敷、越前丹生、越前今立、越前坂井、越前大野、能登珠洲、越中下新川、越後中頸城、越後中蒲原、越後南蒲原、丹波多紀、丹波氷上、但馬美含（2か所）、但馬出石、但馬城崎、但馬養父、但馬七美、因幡岩井、伯耆河村、伯耆久米、出雲仁田、石見美濃、播磨宍粟、美作久米南條、備中浅口、備後三崎、周防玖珂、紀伊伊都、紀伊名草、紀伊有田、紀伊西牟婁、淡路津名、阿波板野、阿波勝浦、阿波那賀、伊予喜多、土佐高岡、土佐幡多、豊前京都、大隅囎唹

② オホダニ（2村）：伯耆八橋、出雲意宇

③ オホガダニ（1村）：出雲大原

④ オホガイ（1村）：磐城行方

⑤ オホヤ（18村）：遠江豊田（2か所）、駿河有度、相模高座、武蔵北足立、武蔵比企、武蔵南埼玉、武蔵榛澤、常陸真壁、常陸信太、常陸東茨城、上野碓氷、下野鹽谷、磐城楢葉、陸前柴田、陸前本吉、羽前西村山、羽後由利

⑥ オホヤツ（2村）：上総望陀、上総周准

「大塚」の場合は、下の村名データの因幡国高草郡のオホヅカ村が郵便番号簿地名の鳥取市大塚（オオヅカ）になっているのだと思うが[17]、他にも郵便番号簿でオオヅカとされている「大塚」地名は群馬県から福岡県に多少存在している（群馬県藤岡市、群馬県吾妻郡中之条町、埼玉県深谷市、埼玉県比企郡川島町、広島県広島市安佐南区、福岡県朝倉郡筑前町）。オオヅカ新田なら新潟県魚沼市にある。オオヅカが消失してはいないが、オオツカがはるかに多い事情に変わりはない。オオツカは宮城県から鹿児島県に広く分布している。

【大塚（村）】

① オホツカ（39村）：山城宇治、大和廣瀬、摂津島上、伊勢安濃、伊勢飯高、

[17] 現在のWikipediaは、明治期以降の村の存亡・合併を詳しく扱った地域も全国にかなりあるが、高草郡の記述に明治22年の町村制以前のものがほとんどなく、詳細は不明。

尾張中島、三河東加茂、三河幡豆、三河宝飯、甲斐西八代、武蔵南多摩、武蔵北埼玉、武蔵榛澤、武蔵北葛飾、常陸新治、常陸真壁、常陸河内、常陸信太、常陸東茨城、常陸多賀、近江蒲生、信濃更級、上野吾妻、下野下都賀、羽前東村山、越中婦負、越後刈羽、越後北蒲原、越後岩船、但馬養父、伯耆汗入、出雲能義、出雲神門、安藝沼田、安藝山縣、筑前夜須、豊前下毛、豊前宇佐、日向宮崎

② オホヅカ（２村）：因幡高草、伯耆久米

地名の「大～」は、連濁・非連濁に関して明治時代以降大きな変化をしていないと考えられるが、連濁地名が減少したと考えられる場合もあり、「大崎」や「大寺」の場合がそうである。村名データを見ると、オホサキ18村に対してオホザキ６村で、オーサキ村の方が明治時代でもオーザキ村より一般的ではあったが、オーザキ村もそれなりに存在していた。ところが、現代の地名では、郵便番号簿地名に「オオザキ」は３件（岡山県岡山市、鳥取県米子市、福岡県小郡市）しか残っていない。連濁から非連濁へと言語変化した事例がかなりあったことが推定できる。

【大崎（村）】

① オホサキ（18村）：三河宝飯、三河渥美、遠江敷智、武蔵北足立、武蔵南埼玉、下総香取、下総猿島、下総豊田、陸前玉造、陸中南九戸、羽後南秋田、加賀河北、越後南魚沼、佐渡羽茂、丹波氷上、周防佐波、土佐吾川、筑後御原

② オホザキ（６村）：越後刈羽、越後北蒲原、伯耆会見、出雲大原、肥前北松浦、肥前杵島

「大寺」の場合は明治の村名データでは連濁語形しかなく、「大～」地名が連濁から非連濁へと変化したさらに極端な場合である。

【大寺（村）】

① オホデラ（４村）：上総望陀、羽前東村山、越後三島、阿波板野

② ダイジ（１村）：近江東浅井

『地名索引』にオーテラの読みはなく、オーデラとダイジしかないが、現代の郵便番号簿では、非連濁のオーテラと読む「大寺」の方がはるかに多くなっている（山形県東村山郡山辺町、千葉県木更津市、新潟県三島郡出雲崎町、徳島県

板野郡板野町)。オーデラと読む字名は千葉県匝瑳市にあるだけである。現在、オーテラと読む地名のある4か所は過去に「オホデラ」と呼ばれる村のあった場所なので、オーデラという地名がオーテラに変化したことは間違いない。「寺」は明治期から現在に至るまで複合語後項で連濁しやすい要素だった。『地名索引』では野寺村の発音はノデラしかなかった(三河碧海、近江東浅井、美濃海西、越中砺波、因幡高草、播磨加古)。明治の村名に非連濁語形のあった山寺村(ヤマテラ4村:磐城亘理、羽後飽海、越後西頸城、越後北蒲原、ヤマデラ2村:近江栗太、羽前東村山)が郵便番号簿ではすべてヤマデラになっているのは、連濁傾向を現代にかけてさらに強めたためと考えられる。「小寺」の場合[18]も、現在、郵便番号簿にはコデラの発音しかなく、「大寺」で起きたような連濁の解消は起きていない。それにもかかわらず「大寺」がオーデラからオーテラに変わったのは複合語前項の「大」の連濁抑制力の増大が関係していると考えるのは妥当な推定だろう。

しかし、「大崎」や「大寺」のように「大」の連濁抑制力が現代にかけてやや強まったのではないかと考えられる場合もないわけではないが、明治の村名でも劣勢だったオーデ(大手)やオーダキ(大滝)やオーバタ(大畑)が現在の郵便番号簿でも残っているし、「大〜」地名の連濁・非連濁という現象を全国的に全体として捉えるなら、「大」の非連濁傾向は強くも弱くもなっておらず、そのまま維持されていると見るべきだろう。

【大手(村)】

① オホテ(3村):摂津八部、下総香取、越前今立

② オホデ(1村):尾張東春日井

【大瀧(村)】

① オホタキ(10村):大和吉野、武蔵秩父、美濃不破、羽前西置賜、羽前西村山、越前今立、能登鳳至、伯耆日野、紀伊伊都、土佐長岡

② オホダキ(1村):越中砺波

【大畑[19](村)】

① オホハタ(15村):山城相楽、大和葛下、摂津有馬、三河西加茂、駿河駿

[18] じつは、明治の村名ではコテラ村も播磨国明石郡にあった。神戸市西区の伊川谷町小寺が小寺村に由来した地名のようであるが、郵便番号簿ではコデラという発音に変わっている。

[19] 他にオホハタケが1村(常陸新治)、オホバタケが4村(武蔵南埼玉、武蔵南葛飾、越前吉田、因幡高草)あった。

東、下野芳賀、下野那須、陸中稗貫、陸奥西津軽、陸奥下北、播磨明石、播磨加古、播磨神東、播磨多可、紀伊伊都

② オホバタ（3村）：相模大住、磐城西白河、越前丹生

明治の村名の必ずしも後継地名ではないが、郵便番号簿の地名として、オオデは、福井県越前市大手町と愛知県春日井市大手町があるし、オオダキは、神奈川県横須賀市大滝町と高知県長岡郡大豊町大滝がある。オオバタは、青森県つがる市木造大畑、宮城県登米市南方町大畑、秋田県大仙市南外大畑、福井県丹生郡越前町大畑、岐阜県多治見市大畑町、愛知県豊田市大畑町がある。もし「大」の非連濁傾向が現代にかけて強くなっているのだとしたら、このような劣勢の連濁地名は非連濁地名へと変化していたはずである。

しかし、連濁抑制力を「大」が維持しているなら、起こるはずのない、非連濁語形から連濁語形へと大きく変化した「大～」地名の場合も多少ある。これについては、「大」の連濁抑制力とは矛盾せず、後項要素に理由があると考えているが、実例を見ながら説明したい。

【大口（村）】

① オホクチ（10村）：伊勢飯高、下総猿島、陸前玉造、羽前東田川、羽後山本、加賀能美、越後中頸城、越後中蒲原、越後南蒲原、肥後宇土

② オホグチ（1村）：武蔵南埼玉

現代の郵便番号簿地名では「オオクチ」と「オオグチ」の発音は拮抗しているが、明治の村名データではオホグチ村が1村だけだったので、明治期と比べてオーグチが多くなっていることは間違いない。愛知県丹羽郡には大口町（オオグチマチ）があり、山形県鶴岡市に矢黒町大口（ハグロマチオオグチ）があり、茨城県坂東市と埼玉県さいたま市岩槻区に大口（オオグチ）がある。一方、非連濁の「大口」も現代の地名にかなり存在し、鹿児島県大口市はオオクチ市であるし、秋田県山本郡三種町や新潟県長岡市や五泉市、香川県仲多度郡まんのう町にある「大口」は「オオクチ」である。熊本県宇城市の三角町大口もオオクチであるし、石川県能美市大口町はオオクチマチ、三重県松阪市大口町はオオクチチョウである。非連濁傾向の強い「大～」地名であるのになぜ「大口」は連濁傾向が強くなってきているのであろうか。それは、複合地名の後項の「口」が強い連濁傾向を持つようになったためというのがわたしの考えである。したがって、「大口」だけでなく、「山口」や「川口」のような地名も非連濁から

連濁へと傾向を変えているはずであるが、実際その通りの言語変化が生じている。「山口」や「川口」のような一般的な地名は、現代の郵便番号簿地名で見ると、全国に広く分布している[20]。現代では、どちらも非連濁語形はほぼ消滅しており、ヤマクチは、新潟県新潟市西蒲区に山口新田（ヤマクチシンデン）があり、あとは、岐阜県高山市丹生川町山口（ニュウカワチョウヤマクチ）があるだけである。カワクチの方も岐阜県羽島市に「小熊町川口（オグマチョウカワクチ）」があるのがほとんど唯一の例である。新潟県岩船郡関川村にも上川口という複合地名があるが、上川という河川があるわけではなく、上＋川口なのだろうが、郵便番号簿では「カミカワクチ」とされている。しかし、ネット上には「カミカワグチ」と表記しているひともいるので、連濁と非連濁でゆれているのかもしれない。山口村と川口村の明治の村名データを下にあげるが、ヤマクチやカワクチがかなりあったので、これらの後継地名は連濁するようになったものと考えられる。そして、この言語変化は「山口」や「川口」に限られるわけではなく、後項を「口」とする複合地名一般にあてはまる言語変化だったのだろう。したがって、「大口」が連濁を抑制する「大」を前項とする地名であるにも関わらず連濁する傾向をもつに至ったのは、地名複合語の後項要素の「口」の言語変化が影響したと推定できる。

【山口（村）】

① ヤマクチ（31村）：伊勢員弁、尾張中島、上総山邊、常陸筑波、美濃本巣、上野南勢多、下野河内、岩代南会津、岩代安積、陸中東和賀、陸中東閉伊、陸中西閉伊、羽前西置賜、羽前北村山、越前坂井、越後古志、越後南魚沼、越後岩船、但馬朝来、播磨加東、美作英田、備前赤坂、備中小田、阿波那賀、伊予越智、筑前鞍手、豊前京都、肥前西松浦、肥前北松浦、肥前杵島、肥後玉名

② ヤマグチ（27村）：大和忍海、大和吉野、大和宇陀、摂津西成、尾張愛知、遠江敷知、武蔵入間、上総市原、下総下埴生、下総豊田、常陸西茨城、岩

[20]「山口」は、郵便番号簿地名では、北海道から熊本県まで分布している。分布していないのは、宮崎県、鹿児島県、秋田県、宮城県、東京都、山梨県、長野県、富山県、大阪府、高知県、広島県、沖縄県だった。類似の意味で「山本（元）」や「山下」や「山根」や「山崎」などの地名も広く分布しているので、地域性があるものと思われる。「川口」も北海道から熊本県まで分布しているが、存在しない県は少し増える（青森県、栃木県、群馬県、神奈川県、山梨県、静岡県、長野県、石川県、福井県、滋賀県、奈良県、香川県、愛媛県、鳥取県、島根県、福岡県、佐賀県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県）。この場合も「川本」「川根」「川崎」などと分布を分け合っている可能性がある。

代信夫、陸奥三戸、陸奥東津軽、越後東頸城、越後中頸城、越後西頸城、越後刈羽、越後北魚沼、越後北蒲原、伯耆久米、出雲神門、紀伊日高、筑前穂波、豊前宇佐、豊後東國東、琉球知念間切

【川口（村）】

① カハクチ（15村）：伊勢度会、陸中北巌手、羽前最上、羽前南村山、羽後由利、越中射水、越後中魚沼、美作久米南條、備前邑久、備後深津、紀伊有田、紀伊東牟婁、土佐長岡、土佐吾川、肥後葦北

② カハグチ（15村[21]）：山城綴喜、摂津西成、伊勢一志、三河幡豆、武蔵比企、武蔵北埼玉、安房朝夷、下総匝瑳、美濃安八、岩代大沼、羽後仙北、羽後北秋田、土佐高岡、土佐幡田、肥後上益城

3拍後項が現代では強い連濁傾向をもつように言語変化したことは「小～」地名の場合で見たが、「小～」地名の場合はもともと連濁傾向があったのが3拍後項でその傾向が強まったという現象が観察できた。一方、明治の村名データですでに非連濁傾向が認められる「大～」地名の場合は、非連濁傾向と連濁傾向の衝突があったはずで、明治期に非連濁だった村名の後継地名で次第に連濁傾向を強めていったことが観察できる。

【大林（村）】

① オホハヤシ（8村）：三河東加茂、近江野洲、近江蒲生[22]、近江愛知、磐城菊多[23]、安藝高宮、阿波那賀、肥後合志

② オホバヤシ（6村）：三河碧海、武蔵南埼玉、常陸真壁、羽後北秋田、越中上新川、石見邑智

---

[21] 現在の埼玉県川口市になった川口町もカハグチとされ、明治時代から連濁していた。

[22] Wikipedia の蒲生郡の記載中に、3つあった林村（国立歴史民俗博物館の旧高旧領取調帳データベースで確認できる）の2つが合併して大林村になり、残りが杉村に改称したとある。だとすれば、もともとハヤシ村と呼んでいたわけだから、それを連濁させて大バヤシ村にはいきなりしにくかったかもしれない。大正期の『市町村大字読方名彙』では連濁語形に変化したが、その後、消失地名になっている（古くからの「大林」ではなく、オオバヤシという地名へのこだわりも土地のひとになかったはずで、そういうことも地名消失の理由になっているかもしれない）。

[23] Wikipediaによると、磐城国菊多郡大林村は、明治3年に林崎村・大津村が合併して出来た合成地名だったようだ。それぞれから一字ずつ取って並列に並べただけの地名だったわけであるから、こういう語源であれば、上下やあとさきがウエジタやアトザキにならないように当初は連濁しなくて当然だったろう。このようにして出来た菊多郡の大林村は、1889年に山田村の大字になっているが、大正期にはまだ連濁していない。その後、結局、後継地名を残さずに、消失地名になってしまった。

明治の村名の読みではオーハヤシとオーバヤシは拮抗していたが、オーハヤシの方がやや多かった。現在の郵便番号簿地名では、「オオバヤシ」が19件に対して「オオハヤシ」が3件（宮城県栗原市若柳大林、京都府京都市山科区北花山大林町、徳島県小松島市大林町）で、オーバヤシがはるかに多いので、オーハヤシからオーバヤシへと、通常の「大～」地名が非連濁傾向を強めたのとは逆の言語変化が起きている。村名データでオホハヤシとされた村が大正期に『市町村大字読方名彙』(1923) でどのように発音とされ、さらに現在どう発音されているか調べてみたのが次の表である。なお、表記は資料の通りとしたので、オホハヤシとオオハヤシが混在しているが、発音に違いはなかったであろう。

表4　オーハヤシからオーバヤシへ変化した地名

オーハヤシ（村）の発音の推移	地名索引 1885	市町村大字読方名彙 1923	郵便番号簿 2007
三河東加茂	オホハヤシ	オホバヤシ	オオバヤシ
近江野洲	オホハヤシ	オホバヤシ	オオバヤシ
近江蒲生	オホハヤシ	オホバヤシ	消失
近江愛知	オホハヤシ	オホバヤシ	オオバヤシ
磐城菊多	オホハヤシ	オホハヤシ	消失
安藝高宮	オホハヤシ	オホバヤシ	オオバヤシ
阿波那賀	オホハヤシ	オホハヤシ	オオハヤシ
肥後合志	オホハヤシ	オホバヤシ	オオバヤシ

【大平[24]（村）】

① オオタヒラ（13村）：三河西加茂、遠江麁玉、遠江豊田、駿河庵原、伊豆田方、磐城菊多、磐城亙理、磐城田村、岩代安達、羽前南置賜、越中下新川、越後西頸城、越後中頸城

② オオダヒラ（1村）：常陸久慈

郵便番号簿の地名ではオーダイラという地名は高知県と大分県には分布があるが、中国地方や近畿地方にはまったく分布がなく、あとは、愛知県以北の北日本に広く分布している。しかし、オーダイラという発音の「大平」がほとんど

[24] ここには後項が3拍以外の村名データを含めていないが、オホタヒ村が1か所、オホヒラ村が19か所にあった。

で、オータイラは2か所にしかない（福島県二本松市の「大平中井（オオタイラナカイ）」、北海道岩見沢市の「栗沢町万字大平（クリサワチョウマンジオオタイラ）」）。したがって、オーダイラが古い地名の後継地名なら以前はオータイラと非連濁だったことが予想される。現在の静岡県につながる伊豆国田方郡、駿河国庵原郡、遠江国麁玉郡、遠江国豊田郡にオホタイラ村がかつてあったわけだが、現在の静岡県には、伊豆市大平、磐田市大平、浜松市浜北区大平の3か所に「オオダイラ」しかない。『市町村大字読方名彙』では、連濁・非連濁がまだ半々だったようだ。田方郡下狩野村大平と引佐郡麁玉村大平が「オホタヒラ」で、庵原郡両河内村大平、磐田郡敷地村大平が「オホダヒラ」だった。その後、庵原郡両河内村の大平は後継地名を失い、消失し、田方郡下狩野村大平と引佐郡麁玉村大平の後継地名はオータイラからオーダイラに発音を変えたことになるだろう。

【大泊（村）】
① オホトマリ（4村）：能登鹿島、能登鳳至、紀伊南牟婁、豊後北海部
② オホドマリ（1村）：武蔵南埼玉

現在の郵便番号簿地名ではオードマリとオートマリは両方が見つかる。オートマリは、石川県七尾市に大泊町があり、大分県臼杵市の大字にも大泊がある。一方、オードマリは、青森県東津軽郡今別町や埼玉県越谷市にオードマリがあるし、石川県輪島市に門前町大泊がある。また、三重県熊野市に大泊町（オードマリチョー）がある。オードマリの方が多くなっているが、明治期の村名ではオードマリが1村に対してオートマリが4村だったわけであるから、連濁へと言語変化したことになる。

後項が1拍の場合は、共通して連濁傾向が強まったとは言えないが、個々に見れば、変化した場合がある。「太田」や「大木」の場合は、元から非連濁傾向が強く、これは現在に至るまで変わっていない。「大戸」の場合は、現代の郵便番号簿では会津若松市に合併後の複合地名として大戸町石村などがあり、オオトマチと発音しているが、他は連濁が多い。実は、明治期の村名では「オホト」が多かったので、非連濁だったものが連濁へと変化したことになろう。連濁しやすい1拍後項と連濁しにくい1拍後項があるが、どういう区別なのか不明である。

【大田（村）】

① オホタ（21村[25]）：河内志紀、尾張知多、三河東加茂、常陸新治、美濃下石津、美濃恵那、下野下都賀、磐城田村、陸中西和賀、能登羽咋、能登鹿島、越中砺波、丹波南桑田、石見那賀、美作吉野、備後御調、安藝賀茂、肥後山本、肥後山鹿、薩摩日置、薩摩伊佐

② オホダ（１村）：長門美禰[26]

③ ダイタ（１村）：三河東加茂

【大木（村）】

① オホキ（７村）：大和式下、和泉日根、伊勢員弁、上総武射、常陸真壁、播磨多可、備前津高

② オホギ（１村）：肥前西松浦

③ ダイキ（２村）：尾張海東、下総北相馬

【大戸（村）】

① オホト（12村）：武蔵北足立、安房安房、上総市原、上総夷隅、下総香取、下総岡田、常陸東茨城、常陸鹿島、羽後雄勝、羽後河邊、越後西蒲原、阿波海部

② オホド（３村）：武蔵南埼玉、上野吾妻、丹波舩井

３．コとオの連濁促進力の差

「小～」地名で「小」に連濁促進力があり、現代にかけて多くの地名を連濁させたことを２．１で確認したが、それでは、コと読む場合とオと読む場合で連濁促進力に違いはないだろうか。明治の村名の状況と現代の地名の状況について考察をしておきたい。とはいえ、そもそもコが明治期の村名ですでにほとんどなかった「小川」のような場合はコとオの比較ができないし、事例が少ない地名やコとオで発音を変えている地名でもコとオのどちらが連濁を推進させる力

---

[25] 他に「太田」と表記するオホタ村があり、こちらの方が多く、全国に52村あった。タタ村と読む村が但馬国気多郡にあったが、オホダ村は存在しなかったようだ。

[26] 現在でも中国地方にオーダと発音する地名がかなり残っている。島根県大田市大田町大田は、郵便番号簿ではオオダシオオダチョウオオダであるし、他にも、岡山県、広島県、山口県に「大田（オオダ）」が分布している（岡山市建部町大田、津山市大田、尾道市御調町大田、東広島市安芸津町大田、美祢郡美東町大田）。『地名索引』の調査が不正確だった可能性もあるが、中国地方でもオホタ村となっていたものが多かったので、非連濁から連濁へと変わったことになる。

があったか、判断がつきにくい。

比較的事例数の多い「小倉」と「小浜」でコとオの連濁促進力の違いを検討してみよう。表5は、現代の郵便番号簿から市町村未満の地名から「小倉」や「小倉町」、「小浜」や「小浜町」の発音を調べて、コとオと連濁・非連濁を調べたものである。なお、同一地域に「小倉（町）」や「小浜（町）」の前後に方位や「新」などが入る地名が複数あっても1回しか数えていない。結果を見ると、「小倉」でコと発音する場合の連濁語形の割合が55％に対して、オと発音する場合は93％である。同様な結果を「小浜」の場合も示していて、コの場合の連濁率は38％に対して、オの場合は82％になっている。このことから考えて、現代の地名で、オはコよりも連濁促進力が高いと想定できると思われる。2．1に村名データを出した「小曾根」や「小畑」は、現在の地名では、コソネやコハタが全国に1か所ずつ残るが（兵庫県西宮市小曽根町、大阪府八尾市小畑町）、オソネやオハタは残っておらず、オがコよりも強い連濁促進力をもつことを支持するデータであろう。

表5　コとオの連濁促進力の違い

郵便番号簿地名 2007		非連濁語形	連濁語形
「小倉」	コ	45％（5か所）	55％（6か所）
	オ	7％（3か所）	93％（39か所）
「小浜」	コ	63％（15か所）	38％（9か所）
	オ	18％（2か所）	82％（9か所）

現代の日本語についてコとオで連濁促進力を比較してみたわけだが、小倉村と小濱村の明治期の村名のデータでも同じ傾向は指摘できる。コクラ村が12村なのにコグラ村が2村しかなかったのに、オクラ村が9村に対してオグラ村が13村で、オの方が連濁する村名がはるかに多かった。

【小倉（村）】

① コクラ（12村）：美濃山縣、美濃武儀、下野上都賀、陸中北九戸、羽前西置賜、羽前南村山、越中婦負、佐渡雑太、備前赤坂、筑前那珂、肥前基肄、薩摩高城

② コグラ（2村）：相模津久井、下野那須

③ コガクラ（1村）：肥前西彼杵

④ ヲクラ（9村）：山城久世、河内交野、伊勢三重、下総千葉、下総印旛、上野西群馬、磐城石川、越前丹生、丹波氷上

⑤ ヲグラ（13村）：大和山邊、武蔵橘樹、常陸新治、常陸久慈、近江愛知、近江東浅井、美濃多藝、羽後南秋田、若狭遠敷、丹波多紀、因幡八上、伊予

北宇和、肥後阿蘇

小濱村についてもまったく同じことが言えて、コハマ村とコバマ村ではコハマ村の方が多かったが、ヲハマ村とヲバマ村では連濁するヲバマ村の方が多かったようだ。

【小濱（村）】

① コハマ（9村）：摂津川邊、上総周准、近江野洲、丹後竹野、石見邇摩、石見美濃、阿波那賀、土佐香美、土佐土佐

② コバマ（3村）：磐城行方、伯耆河村、琉球宮良間切

③ ヲハマ（5村）：志摩答志、下総海上、羽後南秋田、伊予風早、小笠原島父島

④ ヲバマ（9村）：駿河益津、武蔵北埼玉、武蔵賀美、磐城菊多、磐城楢葉、岩代安達、肥前南高来、肥後玉名、大隅囎唹

4．言語変化の結果として成立した規則性

「大～」は明治の村名でも非連濁傾向を示したが、「小～」が強い連濁傾向を示すようになったのは、言語変化の結果であり、明治の村名の発音資料ではまだ明確に存在しなかった規則性である。大竹村と小竹村を対象にして、連濁・非連濁の発音の推移を確認しておこう。

【大竹（村）】

① オホタケ（11村）：河内高安、伊豆田方、上総望陀、上総山邊、下総下埴生、常陸鹿島、羽後由利、加賀石川、出雲大原、備中哲多、安藝佐伯

② オホダケ（4村）：武蔵北足立、武蔵南埼玉、上野碓氷、伊予喜多

【小竹（村）】

① コタケ（7村）：能登羽咋、越中射水、越中婦負、越中砺波、越後三島、伯耆汗入、筑前遠賀

② ヲタケ（2村）：相模足柄下、下総印旛

「大～」の「大竹」は、明治の村名では非連濁のオホタケが11村、連濁のオホダケが4村で、非連濁の傾向が強かったが、「小竹」は、コとヲのゆれはあるが、連濁語形がなかった。つまり、明治の村名だけを観察すると、「小」の連濁促進

力は観察できない。しかし、その後の地名の変化を郵便番号簿地名で判断すると、「大竹」は非連濁優勢のまま現在に来ている。大竹市はオオタケであるが、他の「大竹」地名には連濁・非連濁の両方の読み方が郵便番号簿地名にも残存している。言語変化の流れの中で連濁抑制力は維持されたと考えられる。一方、「小竹」地名の場合は、明治期の村名では連濁語形がまったくなかったが、郵便番号簿地名では、連濁語形のコダケやオダケが使われるようになり、2.1で見た他の「小～」地名と同様に、連濁語形の方が優勢になっている。また、現在のオダケは、コタケからオダケに変わったものもあるようで、オダケがコダケよりも多くなっているので、千葉県から福岡県にかけての比較的広い地域に分布している（千葉県佐倉市、神奈川県小田原市、富山県高岡市、富山県氷見市、石川県鹿島郡中能登町、島根県安来市[27]、福岡県北九州市若松区、福岡県古賀市、福岡県福津市）。「小竹」地名の場合は、やはり、言語変化の流れの中で連濁傾向が明確な形をとるようになったわけである。なお、現在の地名では、コタケはコダケと併存しているが、オタケは消失してしまっている。これは、3章で述べたコとオの連濁促進力の差が出たものだろう。

連濁傾向を強める言語変化は、3拍の後項にも一般的に起きている。したがって、「大～」に非連濁傾向があるといっても、強い連濁傾向を持つ3拍後項が来ればオーバヤシのように現代では連濁するのが普通であるし、やはり強い連濁傾向を持つようになった「口」のような後項と使われる場合も連濁する方がふつうになってきている。3拍の後項が言語変化の結果として強い連濁傾向を持つようになったことを「小林」「小平」「大林」の発音の変化で確認したし、現代日本語なら3拍の後項にも前項にもあてはまる規則性であることを城岡（2014：179－180）に書いた。「小」「大」と無関係な「郡（コオリ）」の場合で連濁傾向が強まってきている事実を再確認しておこう。現在、郵便番号簿地名で全国の「下郡」という地名を探すとすべて連濁して、シモゴオリである。宮城県遠田郡涌谷町、福島県伊達郡桑折町、千葉県木更津市、三重県伊賀市、大分県大分市にある。また、宮城県亘理郡亘理町に逢隈下郡（オオクマシモゴオリ）があるし、大分市には北下郡（キタシモゴオリ）と南下郡（ミナミシモゴオリ）、下郡中央（シモゴオリチュウオウ）、下郡東（シモゴオリヒガシ）、下郡南（シモゴオリミナミ）、下郡北（シモゴオリキタ）がある。『地名索引』の記録する村名データでは、伊賀国伊賀郡と豊後国大分郡の下郡村はシモゴホリだったが、上

[27] 安来市の大字として合併地名の伯太町上小竹と伯太町下小竹がある。

総国望陀郡、磐城国亘理郡、岩代国伊達郡、陸前国遠田郡の下郡村はシモコオリと連濁しなかった。磐城国亘理郡の下郡村は地名として現存しないようだが、他の宮城県、福島県、千葉県の下郡村はシモコホリだったものが連濁して現在の地名として残っていることになる。

地名複合語の後項が3拍のときに連濁する傾向が明治期から現代にかけて強まったわけだが、それは前項についても言えることである。「柏原」という地名では、「柏」の部分の発音がカシワの場合とカシの場合があって、2拍と3拍の対比をするには便利である。まず、現代の状況だが、郵便番号地名で「柏原」を調べると、以下の通りである。

① カシハラ……9か所
② カシバラ……1か所
③ カシワラ……4か所
④ カシワハラ……1か所
⑤ カシワバラ……19か所

2．1の「小原」のところで述べたように「原」は比較的連濁しにくい後項要素だと考えられる。それゆえ、前項が2拍なら連濁しないカシハラが多く、カシバラは島根県益田市の柏原町だけである。ところが、「柏」をカシワと3拍で発音すると、連濁しないカシワハラは、熊本県宇城市の不知火町柏原（シラヌヒマチカシワハラ）が唯一の例である。全国の19か所でカシワバラと連濁している。

しかし、3拍前項で連濁する強い傾向という現代日本語の規則性は、明治の村名の場合にはあてはまらない。

【柏原（村）】
① カシハラ（5村）：大和葛上、河内志紀、摂津川邊、摂津能勢、筑前早良
② カシバラ（1村）：紀伊伊都
③ カイハラ（1村）：丹波南桑田
④ カヤハラ（1村）：丹波南桑田
⑤ カシハハラ（7村）：近江坂田、近江伊香、岩代北会津、丹波北桑田、讃岐阿野、日向宮崎、薩摩伊佐
⑥ カシハバラ（8村）：伊賀名張、三河宝飯、武蔵高麗、上総市原、信濃上水内、石見美濃、紀伊伊都、肥後宇土
⑦ カシハバル（1村）：豊後直入

2拍の場合に非連濁のカシハラが多いのは現代と変わらない。なお、カシハラ

とカシワラの発音の区別は当時の表記では不明だ。「カシハ」と3拍で発音する村名の場合は、拮抗していて、連濁のカシハバラ村が8村で、非連濁のカシハハラ村も7村もあった。現代の郵便番号簿ではカシワハラが1か所に対してカシワバラが19か所なのだから、非連濁から連濁へと大きく動いたことが確認できる。「柏原」は、明治、大正、昭和という時間軸の中で3拍前項が強い連濁促進力を獲得したようであるが、発音資料が十分にはそろわないので、いつ頃なのか特定することはできない。しかし、1939年のNHKの『同字異読語彙』が地名の「柏原」の発音をカイバラ、カシハラ、カシワバラ、カシワバルとしているところを見ると、昭和初期には確立していたのであろう。

5．要約と補足

明治の村名から現代の地名までを対象に地名複合名詞の「小～」と「大～」の連濁・非連濁について規則性や言語変化について述べてきたが、要点は以下のようにまとめることができる。

明治期と現代の傾向と言語変化（要約）

	明治期村名	郵便番号簿地名（2007）
「オ・コ～」地名（小）	連濁傾向は強くなかった	とくにオと発音する場合に強い連濁傾向を持つようになった
「オー～」地名（大）	非連濁傾向は存在していた	非連濁傾向を維持している

（補足）
★明治期以降の言語変化で3拍の後項は一般的に強い連濁傾向を持つようになったので、オーが前項の場合でも、オーバヤシのようになるのが標準的になった。
★「口」のような特定の後項でも連濁傾向が強まったものがある。そういう場合は、オーとの組み合わせでも連濁するように変化している。

補足すると、地名では、「小」と「大」の対立がオとオーになることが多いが、これについて私見を書いておきたい。普通名詞や一般の語彙では「小」と「大」では連濁・非連濁の違いが明瞭ではないが、「小」をオと発音することがすでにほとんどない。つまり、一般語彙では「小」と「大」がコとオーで形式的に明瞭に区別されている。一方、固有名詞では、現在でも、「小」をオと発音するのがかなり一般的であり、コよりもオと発音する場合の方が連濁傾向が強いこと

を考えると、オとオーの紛らわしさを軽減する目的で連濁・非連濁が発展した可能性があるだろう。オクラとオークラでは長音の有無による区別だけになるが、オグラとオークラなら紛らわしさが軽減されるだろう。コクラの場合は、コクラとオークラで語形が十分に異なっており、連濁・非連濁で意味の区別を補強する必要はないためコクラがコグラになりにくいという説明が可能であろう。

さて、地名複合語の前項要素の「オ・コ（小）」には強い連濁促進力があると考えられるが、同じ「オ・コ（小）」が前項でも連濁しやすさは後項により変化する。連濁を受け付けにくい後項要素や非常に連濁を受けやすい後項要素があるから、「小」と「大」の連濁促進力や連濁抑制力とあいまって、かなり複雑な仕組みになっている[28]。現代の郵便番号簿地名でも、連濁促進力の強い「小」が前項に使われているのに連濁しにくい複合地名がある一方で、連濁抑制力の強い「大」が前項に使われる複合地名が連濁する場合もあるのは、そのためだと考えられる。こういう後項要素に原因がある場合について、少し、補足しておこう。「大口」でもオーグチと連濁する場合が出てくることを２．２で述べた。逆に、連濁しにくい後項要素もあり、たとえば「浜」[29]や「下」[30]などは地名で頻繁に使われる後項要素であるが、連濁することはほとんどない。「浜」が後項で連濁する地名は、現代の郵便番号簿に頻繁に出て来るものでは、「小浜（オバマ、コバマ）」に限られているが、散発的には他の組み合わせでも出現する。オバマ（福島県相馬市尾浜）は「小」を別の漢字の「尾」で書いただけかもしれないが、他にも、カイバマ（福島県南相馬市原町区萱浜）、ウチバマ（千葉県銚子市内浜町）、スバマ（京都府京都市下京区須浜町）、ヨコバマ（島根県松江市横浜町）、ナカバマ（愛媛県今治市中浜町）がある。「小浜」以外は「浜」をバマと読む地名はかなり例外的な読みである。「中浜」の例で確認すると、「中浜」や「中浜町」で終わる市町村以下の町名は、郵便番号簿で全国に26か所あるが、ナカバマと読むのは今治市以外にはなく、他の25か所ではナカハマと読んでいる。

---

[28] 詳しくは城岡（2014：173－180）を参照されたい。固有名詞一般の連濁・非連濁を説明する試案の概略を述べている。

[29] 「浜」や「紐」や「姫」が連濁しにくいことについては、無声摩擦音と鼻音の組み合わせが連濁を抑制するとか、「紐」の場合にはヒボという言い方との関連で、ライマンの法則に準じた連濁抑制が想定できるなどの説が出されてきているが、十分に説得力のある説にはなっていない。「選択制限」として伊東（2008：87－88）の解説がある。

[30] 「下（シタ）」が後項で連濁する地名は郵便番号簿にほとんど存在しない。ヤジタが２か所（埼玉県さいたま市岩槻区谷下、鳥取県東伯郡琴浦町矢下）、ミヤジタ１か所（宮城県栗原市一迫宮下）、コウジタ１か所（岡山県岡山市神下）である。

ということは、連濁しにくい「浜」を複合語後項にもつ「小浜」に連濁する場合があるのは、やはり、前項要素の「オ・コ（小）」が強い連濁促進力を持っているからと説明できる。

それでは、なぜ地名では紛らわしい音形のオとオーを使い「小」と「大」を区別したりするのだろうか。語形の紛らわしさは、意味が重要でない固有名詞ではそれほど問題にならず、固有名詞では識別さえすればよいのだと考えることができる。語形の類似は、むしろ、同一意味グループの所属語彙だということを示すには適しているのではないだろうか。だとすれば、現代語の普通名詞からはオはほとんど消えているにもかかわらずコからオへの変化の傾向が地名で認められるのはその理由からという可能性がある。

2章で取り上げた陸奥国の二つの小國村はコクニが最終的にオグニに変わってしまっていた。3章で取り上げた「小竹」地名でも明治の村名コタケが7村で、ヲタケが2村だったものが、現在は地名としてオダケがもっとも多くなっていて、「小」の発音がコからオに変わっているものがかなりあると考えられることを述べた。こういうコからオへの変化が陸奥国の小國村や「小竹」地名にだけ起きたことではないことを「小山」地名と「小山田」地名の発音の変化で確認して、その後、オとオーで対立するようになった「小～」地名と「大～」地名について仮説としての私見を述べておきたい。

まず、地名の「小山」の発音であるが、明治の村名ではオヤマとコヤマの読みがあったが、東京周辺はコヤマ村の方がはるかに多かった（武蔵国に3村、下総国に3村、上総国に1村、相模国に1村）。特に、下総国、上総国、相模国にはオヤマ村は存在せず、「小山」をオヤマと読む村は武蔵国荏原郡に1村あっただけだった。

【小山（村）】

① コヤマ（28村）：山城愛宕、山城宇治、大和高市、河内丹北、伊勢一志、相模高座、武蔵都筑、武蔵南多摩、武蔵北足立、武蔵入間、上総山邊、下総東葛飾、下総北相馬、下総猿島、常陸鹿島、近江伊香、美濃加茂、信濃上高井、能登鳳至、越中砺波、丹波船井、但馬養父、出雲神門、播磨明石、播磨佐用、美作久米北條、伊予南宇和、土佐土佐

② ヲヤマ（15村）：河内志紀、伊勢桑名、伊勢三重、尾張丹羽、三河碧海、遠江豊田、武蔵荏原、近江西浅井、下野芳賀、磐城亘理、陸中胆澤、羽後河邊、安藝高田、豊後日田、肥後詫麻

ところが、明治期に多数派だったコヤマ地名が現在さらに優勢になっているというわけではなく、東京都周辺でもオヤマ地名が増えているのである。表6は、現在の東京都周辺の「小山」地名の発音を郵便番号簿で調べたものである。

表6　東京都周辺の小山および小山町

「小山」地名	コヤマ	オヤマ
東京都	2件（品川区小山、東久留米市小山）	1件（町田市小山町）
千葉県	1件（松戸市小山）	2件（千葉市緑区小山町、野田市小山）
埼玉県	3件（川口市安行小山、草加市小山、坂戸市小山）	0件
神奈川県	1件（横浜市緑区小山町）	1件（相模原市小山）

コヤマからオヤマへの地名の変化の流れを東京周辺の地名で確認したが、「小山」に「田」を加えた「小山田」地名でもコからオへの流れを同様に確認することができる。「小山」に比べれば少し珍しい3字名であるが、比較的データがそろう地名であり、コヤマダに対して全国的にオヤマダが増えていることを確認しておこう。明治の村名データでは、拮抗していて、全国にコヤマダ村が8村に対して、ヲヤマダ村が11村だった。

【小山田（村）】

① コヤマダ（8村）：常陸新治、磐城行方、羽後仙北、羽後河邊、加賀能美、筑前糟屋、日向北諸縣、大隅姶羅

② ヲヤマダ（11村）：河内錦部、三河幡豆、磐城菊多、磐城楢葉、陸前柴田、陸前栗原、陸中東閉伊、羽前南置賜、越後中蒲原、伊予風早、豊前築城

郵便番号簿地名で市町村未満の地名が「小山田」や「小山田町」で終わるものを「小山」の場合と同じやり方で数えてみた。なお、方位や上下のついた地名が同一地域に複数ある場合は一つと数えた。合併による合成地名も数えているので、兵庫県洲本市にある「五色町鮎原小山田（ゴシキチョウアイハラコヤマダ）」のような地名も数えている。結果は、コヤマダが8か所（岩手県宮古市小山田、秋田県仙北市西木町小山田、福島県南相馬市鹿島区小山田、茨城県土浦市小山田、石川県小松市小山田町、兵庫県洲本市五色町鮎原小山田、鹿児島県鹿児島市小山田町、鹿児島県姶良郡加治木町小山田）で、オヤマダは16か所（岩

手県花巻市東和町北小山田、宮城県栗原市高清水小山田、宮城県柴田郡大河原町小山田、秋田県秋田市上北手小山田、山形県米沢市広幡町小山田、福島県いわき市大久町小山田、福島県須賀川市上小山田・下小山田、茨城県石岡市小山田、東京都町田市上小山田町・下小山田町、新潟県五泉市小山田、愛知県幡豆郡吉良町小山田、大阪府河内長野市小山田町、愛媛県松山市小山田、福岡県古賀市小山田、福岡県築上郡築上町小山田、宮崎県宮崎市高岡町小山田）だった。つまり、現代では、オヤマダがコヤマダの２倍になっていることになる。明治の村名ではほぼ同数だったわけであるから、オヤマダが大幅に増えていて、おそらく、コヤマダからオヤマダに発音を変えた地名もあるはずだ。

普通名詞ではほぼ消滅した「小」のオという発音が、ゆるやかな変化ではあるが、「小～」地名では増えていることになる。かつてコ・オとオーの対立であった「小～」地名と「大～」地名がオとオーの対立へと変化してきていることになるが、これだけを見れば、母音の長短の違いによる区別であり、以前に増して紛らわしくなっている。なぜこのような紛らわしい通時的変化が起きたのだろう。同族語彙と語形の一般的傾向が背景にあるのではないだろうか。同族語彙は語頭が同音であったり、語形が似ていたりした方がよいということではないだろうか。同族語彙が類似語形をとる例としては、親族語彙のオジサンとオジーサン、オバサンとオバーサン、オジとオバ、アニとアネ、ニーサンとネーサンなどの例や基本色彩語のアカ・アオとクロ・シロの例、ヒトツとフタツ、ヒトリとフタリの例、ダレとドレとドコなど、語頭がd音でそろいつつある疑問詞の例、語頭音の違いで体系的に構成されるコソアドの例など、探せばある程度は見つかる。しかし、同族語彙が語形的類似を示すのは珍しくないとはいえ、取り違えが起こらないようにするには逆に語形が異なっていた方がよいという二律背反的な要請があり、それが、「小」の連濁促進力と「大」の連濁抑制力を発達させる言語変化につながったと見ることができるように思う。オとオーでは紛らわしいが、地名複合語の後項が連濁可能な語形であれば、［オ＋連濁］と［オー＋非連濁］で紛らわしさはかなり軽減されることになるだろう。そのように考えると、本稿で実例を見た「小～」地名と「大～」地名の連濁・非連濁に関する言語変化は、それなりに合理性もあったという解釈が可能である。

【参考文献】

青森放送編（1979)、『新訂青森県地名辞典』、初版は1963。
伊東美津（2008)、「連濁について」、『教養研究』、九州国際大学、83－102。
小川琢治（1923)、『市町村大字読方名彙』、成象堂。
小川琢治（1925)、『日本地図帖地名索引』、成象堂。
海上保安庁（1948)、『日本沿岸地名表』。
鏡味明克（1985)、『地名が語る日本語』、南雲堂。
楠原佑介・溝手理太郎（1981)、『地名用語語源辞典』、東京堂。
建設省国土地理院編（1981)、『標準地名集（自然地名)』増補改定版、日本地図センター。
建設省国土地理院編（1991)、『20万分１地勢図基準自然地名集』、日本地図センター。
小林義則編（1876)、『改正日本地誌略字引大全』第一～第四。
城岡啓二（2014)、「明治時代以降の『～川』の連濁と非連濁について」、『人文論集』64号の１・２、静岡大学人文社会科学部、159－185。
内務省地理局（1881)、『郡区町村一覧』。
内務省地理局（1885)、『地名索引』。
中川芳雄（1978)、「固有名詞の連濁・連清の系譜」『静岡女子大学研究紀要』12号、302－288。
日本放送協会編（1939)、『同字異読語彙』。
日本ユニバック編（1978)、『日本の苗字』表記編、発音編、日本経済新聞社。
藤谷崇文館編（1924)、『改正全国市町村便覧』。